# 資料提供者(敬称略)

## 『東京語アクセント資料』

石 田 敏 子 滝 沢 綾 子 石 渡 崇 子 武市憲幸 土屋信一 上 野 久美子 大 井 得 惠 野 村 雅 昭 小 泉 雅 裕 広 瀬 正 宜 小 暮 紀 子 古 谷 祥 子 沢 木 幹 栄 御園生 倫 子 三 矢 伊津子 篠原和雄 清 水 郁 子 柳沢好昭 鈴 木 重 幸

## 『柴 田 資 料』

浅 野 百合子 熊 谷 康 雄

# 研究協力者

相稱大春小小小沢都中御渡正滋泰源紀澄 幹直由保喜性 以明日春林林木染島生 迟



## 東京大学工学部教授 藤 崎 博 也

昭和57年度から3ヶ年間にわたって行われた文部省科学研究費による特定研究「情報化社会における言語の標準化」は、最終的には10班の計画研究班に分けられ、「標準化の対象としての言語そのものの研究」、「教育における言語の標準化の研究」、「言語の機械処理における標準化の研究」の3分野で研究が進められた。特に第一の分野では、「日本語の標準化の基盤となるべき言語構造」に関する研究班が設けられ、不肖ながら私が代表者をつとめることとなった。この班は最終的には6グループから成り、日本語、特にその標準化の基盤としての東京語の使用の実態を明らかにすることに力を注いだ。

馬瀬・佐藤両氏のグループは、東京語のアクセントを、1万3千という 尨大な数の項目について、19名のインフォーマントを対象として丹念に調 査された。これは、この特定研究の発足に当って主査をつとめられた柴田 武先生が着手されていた予備調査を継承・発展させたものであって、アク セントの研究としては、他に類例のない大規模・詳細なものである。これ だけの調査をなしとげられた馬瀬・佐藤両氏及び十指に余る研究協力者の 方々に、また、御自身の手になる予備調査の結果をすべて提供され、常に 適切な御助言を惜しまれなかった柴田先生に、あらためて御礼を申し上げ る次第である。

私自身は、別の観点から、東京語のアクセント・イントネーションの特徴の分析と記述のプロジェクトを担当しながら、たまたま研究班の代表として班内の問題意識の統一、グループ間の調整、班員全体による討議と意見交換のお手伝いをしたにすぎないが、グループ内討議および班全体の討議の機会を通じて、馬瀬・佐藤グループの調査研究から多くのことを学ぶ

ことが出来た。一方、馬瀬・佐藤グループの計画の遂行の途上で問題となった点、例えば無声音区間におけるアクセント核位置の同定などについては、十分なお手伝いができなかったことをおわびしたい。

さて、この資料集に示された東京アクセントの調査結果は 当初に予想された通り、東京アクセントといえども、既存の辞典類の記載から想像されるような画一的なものではなく、はるかに多様性に富むものであることを示している。これは、通常の辞典類の編纂の過程が、取捨選択を伴うものであること、また、言語使用の実態の客観的調査よりは、編者の主観に基づいて行われるものであることから、ある程度当然のことであろう。この意味で本資料集は、従来の辞典類とは全く異なった価値を持つものであるといえる。

ここに示された東京アクセントに関するおびただしいデータは, さらに 今後の研究への貴重な素材となる。そもそもこの資料の示す多様性の原因 は何であるのか。地域差・年令差・性差など、個人の言語運用の差異によることはもちろんであるが、それ以外に、またそれ以上に、いわゆる語アクセントが文脈により、また談話条件により影響を受けることを、この資料は示唆しているように思われる。このような問題を含め、この資料集が、今後さらに有益な研究成果を生み出すことを期待するものである。

# 期待していた仕事

## ---監修者として---

柴 田 武

1万3千に及ぶ大量の語について、東京の山の手・下町、老年・若年、 男性・女性の属性をクロスさせた計19名のアクセントを一覧できるような 東京アクセント資料集がまとまった。これは、藤崎博也教授のもとで馬瀬 良雄・佐藤亮一両氏をはじめとする多数の分担者・協力者・資料提供者が 3か年にわたって努力した成果である。

かねがね東京語のアクセントは、アクセント辞典などが示しているよう な一様性はないとにらんでいた。地域・年齢、また個人によってもっと多 様なアクセントが行なわれていると思っていた。それを知るためには、長 い語も、やや特殊な語も、もちろん外来語も、また、感動詞などもすべて とりあげて調べてみなければならない。

ちょっとしたきっかけから5年ほど前からひそかにこういう研究に手をつけていた。語を万遍なく集めている『新明解国語辞典』のなかからアクセントのついた約8万のすべての語について、山の手の若年の男性と下町の老年の女性とにそれぞれ自分のアクセントとの異同を記入してもらう計画を立てた。このふたりが全巻にわたってチェックし終わるまでに10か月以上かかった。辞典とこのふたりの三者の間で異動のある語がカードとなり、その数約1万7千(全体の21%)に達した。予期した以上の数字であった。人数をふやせばこの数字はもっと高くなるはずである。

その後、この1万7千語をもとに、わたし自身の手で、山の手の老年の女性、下町の若年の女性のふたりについても情報を集めたが、本来はもっと多くの人に当たらなければならない。

ちょうどそのころ特定研究「情報化社会における言語の標準化」が始ま

り、これこそこのプロジェクトに乗せるべき研究と考えたが、ひょんなめぐりあわせから、わたしはこの研究全体の代表者として研究者間の連絡・調整に専念することになったために、わたしの企画した研究をさらに展開してもらうよう、わたしの資料の一切を馬瀬・佐藤両氏に提供して、お願いしたのがこの資料集作成のそもそもの発端である。ちょうど自分のもうけた子の成長を見守るような気持で3か年この研究を注目して来たし、報告会にも極力出席して、進んで意見も述べた。それがいわば成人した姿でここにお目見得するのだから、これほどうれしいことはない。

言語の「標準化」を考えるのには、まず、言語の「多様性」を確認することから始めなければならない。ことがらが多様でなければ、標準化ということ自身無意味となる。日本語のアクセントについて、いったいどのような標準化を試みたらいいのか、いや標準化を試みるべきか否かについてさえ、実のところわたしにも成案はない。それを考えるのにもこの資料集は最も基本的な情報源になりうる。また、「標準化」ということを離れても、この資料集を使ってアクセントについて多年暖めて来たいろいろな課題を究めたいという意欲を燃やしているが、これは何もわたしだけではなかろう。計算機のながにすべて入っていることは、このためにはまことに好都合である。

いささか仕事を押しつけたのではないかと、たえず気の引ける思いでいた者にとって、まず、そのことについておわびしなくてはならない。そして、厳密を期する担当者たちの想像を絶する労苦にねぎらいのことばをおくりたい。

# まえがき

#### 1. 研究目的

特定研究「言語の標準化」の藤崎班研究課題「日本語の標準化の基盤となるべき言語構造」のなかで、馬瀬・佐藤グループは次の目的で研究を行った。その第1は次のとおりである。

1 東京語アクセントの多様性の実態を明らかにし、その資料を『東京語アクセント資料』として編む。

標準アクセントの基盤を東京語アクセントにおくことについては、すでに先学によって述べられ、それに対する異論はあまり聞かれない。もっともそれはまったくないわけではない。そして、それと関連して東京語の基盤の上に標準アクセントを決めた場合、それの習得・普及の点については従来から危惧の声が高かった。しかし、テレビ時代を迎え、テレビによる東京語アクセントの若い世代に対する影響力は極めて大きく、それは東京式アクセント地域は言うに及ばず、京阪式アクセント地域や、さらに無型アクセント地域にも及んでいる。その結果、東京語アクセントは今や全国共通語としての地位を着々と確立しつつあり、事の是非を問わず、現実の東京語アクセントを標準アクセントの基盤とせざるをえない状況に立ち至っている。

それならば、現代東京語アクセントの実態は明確に把握されているかと言うに、過去における諸学者の秀れた研究はあるけれども、現時点ではいまだ不十分な点を残していると言わざるをえない。そこでわれわれのグループが第1に目指したのは、標準アクセントを選定するに必要にして十分な現代東京語アクセント資料の収集である。中でも、地域差、年代差、男女差、個人差などによるほか、併用による多様性の見られる東京語アクセ

ントの実態把握がその根幹となる。本書はこの点についての実態調査の資料をまとめたものである。

研究目的の第2は次のとおりとなる。

2 『東京語アクセント資料』の分析にもとづき、標準アクセント選 定の方法を研究する。

本書資料の分析の上に立ち、多様性を見せる現代東京語アクセントからいかにして標準アクセントを選定するか。当然のことながら、その方法論の確立が要請される。現代東京語アクセントが標準アクセントの基盤であるにしても、そのまま標準アクセントとすることはできないからである。

目的の2については、資料整理の各段階に応じて、随時検討を行い、その成果の一部はすでに発表して来た。ただし、その本格的・総合的研究は本書の刊行をまって行われる。

## 2. 研究のあらまし

## 2.1 調査語の選定

調査語選定の基礎資料として、われわれは「柴田資料」と称する資料を 用いることとした。

「柴田資料」は現代東京語アクセントの多様性を見るために集められた 資料目録で、われわれが用いたものは柴田武氏により次の手順により作成 された。

1) インフォーマントとして、出身地・年齢・性がそれぞれ対立する 2 名の生粋の東京人が選ばれた。具体的に言えば、山の手出身の若年層 男性 1 名(Xと略称)、下町出身の老年層女性 1 名(yと略称)である。

- 2) この2名が『新明解国語辞典』(第3版第1刷,三省堂,昭56)――以下では『新明解』と略称することが多い――におけるアクセントのついた80,846のすべての語と、自己のアクセントとを比べて異なるものをチェックした。
- 3) 『新明解』とXとyの三者のアクセントが一致しない場合をすべて 書き出し、カード化した。その数は17,518枚である。なお、『新明解』 が複数のアクセントの型を載せている場合は無条件にこれに含めた。
- この17,518枚(=17,518語)がわれわれが用いた「柴田資料」である。 なお、「柴田資料」にはこのほかに2名の東京人によるアクセント資料を 含むが、今回はこの資料の利用は行わなかった。以下で「柴田資料」と称

するときは,断わらないかぎりXY両氏のものについていうこととする。

4)取り出された語は3者のアクセントとともにカード化される。

われわれは、この資料から日常比較的よく用いる語を中心に調査語を選定した。「柴田資料」の全語を調査しなかったのは、時間的・経費的にそれが無理をともなうばかりでなく、インフォーマントがあまり用いない語についてそのアクセントを調査することは、意味が少ないと判断したためである。調査語の選定は、馬瀬良雄・佐藤亮一が沢木幹栄(のちに小林隆が加わる)とともに行った。ただ、この作業はアクセント調査と平行して行われたので、全体の収録語数とのからみで、選定語の基準に初めとあととでは多少の揺れのあることを認めざるをえない。

次に、日本放送協会編『日本語発音アクセント辞典』(第15刷、日本放送出版協会、昭49)――以下では『NHK』と略称することが多い――から、「柴田資料」には含まれない語で複数のアクセント型を有する日常語を、調査語として補った。

これら以外に,調査語と語形・意味等で関連のある語を中心に少数補った。

こうして選ばれた語数は見出し語総計約12,800語である。

#### 2.2 インフォーマント

インフォーマントの選定にあたっては次の諸点を考慮した。

- 1)出身地については、インフォーマントが5歳から15歳の間、東京都区内に成育していること、及び、インフォーマントの両親のいずれもが 乙種アクセント(東京式及び準東京式アクセント)地域の出身であることを原則とする。
- 2) インフォーマントの年代層は現在社会で活躍している(または活躍 しようとしている)20代から50代とし、比較のために60・70代をも加 えた。その人数は前者17名、後者2名である。
- 3) 学歴は、新制度履修者については、男性は大学学部卒業以上、女性は短期大学卒業以上とし、旧制度履修者については、男性は中学校卒業以上、女性は高等女学校卒業以上とした。ただし、後者については実際には男性に該当者なく、女性は旧制専門学校卒業以上の学歴を有する者が選ばれた。

なお,選定にあたっては,男女,及び,山の手・下町の地域が一方に偏 しないよう留意した。

資料では19名のインフォーマントはAからsのアルファベット(男性は大文字、女性は小文字)によって表わされている。これらのインフォーマントについて、以下の①~⑦を紹介する。

①性 ②生年(西暦) ③職業 ④最終学歴 ⑤居住歴 ⑥山の手・ 下町の別 ⑦父母の出身地

なお、③では調査開始時と終了時とで職業を異にするときは、その両者を終了時、開始時の順に記した。また、無職の場合は、調査開始以前の職業を(元)の次に記した。④では大学院修士課程、博士課程を区別しなかった。この点は③においてインフォーマントが学生の場合も同じ。⑤の居

住歴では、都区内の場合は区名を記した。しかし、それが山の手・下町の 両者を含む場合は、さらに細かに記した。例えば、「文京区根津」のよう に。⑥はインフォーマントの居住歴からその言語が山の手的か下町的かを 判定し、それを「山の手」「下町」によって表わした。中には若干問題の あるものを含むがとりあえずどちらかに分類した。⑦にはインフォーマン トの父母が言語形成期に居住した主な地域を記した。

- A ①男性 ②1962 ③学生 ④大学(在学中) ⑤0——現在 葛飾区 6)下町 (7)父—北区 母—江東区
- b ①女性 ②1959 ③中学校教諭 ④大学 ⑤0——10 世田谷区,10 ----12 新潟県新潟市, 12----現在 渋谷区 ⑥山の手 ⑦父--埼玉県 深谷市 母一千葉県四街道市
- C ①男性 ②1958 ③大学院生 ④大学院(在学中) ⑤ 0——現在 江東区 ⑥下町 ⑦父一江東区 母一新潟県小千谷市
- d ①女性 ②1958 ③会社員 ④大学 ⑤ 0——現在 目黒区 ⑥山 の手 (7)父一富山県富山市, 新宿区 母一目黒区
- E ①男性 ②1953 ③日本語学校教師 ④大学 ⑤ 0──2 千代田区, 2——現在 板橋区 ⑥下町 ⑦父一長野県北佐久郡軽井沢町 母一埼 玉県川口市
- F ①男性 ②1950 ③研究所員 ④大学院 ⑤ 0——25 江戸川区, 25 ——29 北区, 29——33 千葉県松戸市, 33——現在 江戸川区 **6**)下 町 (7)父一新宿区 母一江戸川区
- g ①女性 ②1947 ③家業手伝 ④大学 ⑤ 0——現在 文京区根津 ⑥下町 (7)父一文京区根津 母一江東区
- H ①男性 ②1943 ③大学教官 ④大学院 ⑤ 0——1 爱知県名古屋

- 在 東京都三鷹市 ⑥山の手 ⑦父―渋谷区 母―渋谷区
  - i ①女性 ②1943 ③無職, (元)小学校教諭 ④大学 ⑤ 0——38 北区滝野川、38——現在 東京都国分寺市 ⑥下町 ⑦父一千代田区 母一静岡県袋井市
  - J ①男性 ②1939 ③研究所員 ④大学 ⑤ 0——5 港区広尾, 5— ─6 三重県四日市市,6──10 港区広尾, 10──16 港区赤坂, 16── 27 大田区六郷, 27——28 杉並区, 29——39 東京都東久留米市, 39 父一港区芝 母一港区赤坂
  - K ①男性 ②1939 ③大学教官,研究所員 ④大学院 ⑤ 0——2 大 田区雪ヶ谷、2--6 台東区、6--7 埼玉県浦和市、7--24 台東区、 24—26 東京都小平市, 26—27 東京都武蔵野市, 27—34 東京 都小平市,45——現在 香川県高松市 ⑥下町 ⑦父一長野県北佐久 郡軽井沢町 母一渋谷区
  - 1 ①女性 ②1935 ③大学教官 ④大学院 ⑤ 0──28 大田区中央, 28-29 フランス, 29-33 大田区中央, 33-35 アメリカ, 35 ---現在 大田区中央 ⑥山の手 ⑦父―港区西麻布 母―港区高輪
  - m ①女性 ②1935 ③主婦 ④短大 ⑤ 0——23 渋谷区, 23——24 北海道紋別市, 24——28 東京都町田市, 28——現在 大田区中馬込 ⑥山の手 (7)父一岐阜県高山市 母一岐阜県高山市
  - N ①男性 ②1930 ③大学教官 ④大学院 ⑤ 0——30 渋谷区, 30 --現在 東京都調布市 ⑥山の手 ⑦父―埼玉県上福岡市 母―静 岡県榛原郡金谷町
- o ①女性 ②1930 ③中学校教諭 ④大学 ⑤ 0——3 北区, 3——5 文京区壬駄木、5——6 神奈川県鎌倉市、6——10 埼玉県大宮市、10 市, 1---7 新宿区, 7---26 渋谷区, 26---35 アメリカ, 35---現 ---11 港区青山, 11---15 文京区小石川, 15---24 新宿区, 24-

- 一群馬県安中市
- P ①男性 ②1929 ③中学校教諭 ④大学 ⑤ 0──18 江東区,18─
   ─29 渋谷区, 29──43 東京都保谷市, 44──現在 東京都東村山市
   ⑥下町 ⑦父─江東区 母─埼玉県大宮市
- q ①女性 ②1929 ③無職, (元)中学・高校教諭 ④大学 ⑤ 0—16 目黒区, 16—17 鳥取県鳥取市, 17—現在 目黒区 ⑥山の手 ⑦父一山口県防府市 母一文京区本郷
- r ①女性 ②1920 ③無職 ④専門学校(旧制) ⑤ 0—4 豊島区, 4—6 韓国京城 6—24 豊島区, 24—25 群馬県渋川市, 25— 現在 豊島区 ⑥山の手 ⑦父一山形県鶴岡市,新宿区 母一山形県 鶴岡市,港区青山
- s ①女性 ②1911 ③無職,(元)大学教官 ④大学院 ⑤ 0—30 港区赤坂,30—60 文京区千石,60—63 新宿区,63—現在 千葉県君津市 ⑥山の手 ⑦父一山口県山口市 母一千代田区

なお、「柴田資料」のインフォーマント $X \cdot y$  両氏についても、 $A \sim s$  にならって① $\sim$ ⑦を次に記す。

- X ①男性 ②1955 ③会社員,大学院生 ④大学院 ⑤ 0――現在 新宿区 ⑥山の手 ⑦父―新宿区 母―山形県酒田市
- y ①女性 ②1920 ③日本語教育家 ④大学専攻部(旧制) ⑤ 0—13 港区芝, 13—42 世田谷区, 42—60 目黒区, 60—現在 板橋区 ⑥下町 ⑦父—福岡県福岡市 母—千代田区

## 2.3 調査票の作成

調査票については、表1を見られたい。

- 表 1
  - 1 露草が咲く。
  - 2 成敗は時の運。
  - 3 渦中の人。渦中が。
  - 4 光陰矢のごとし。光陰が。
  - 5 学がある。(学=知識)
  - ダイヤを買う。(ダイヤ=ダイヤモンド)ダイヤが乱れる。(ダイヤ=ダイヤグラム)
  - 7 ディーゼル機関が。
  - 8 態度が硬化する。硬化が。
  - 9 薬剤の散布を行う。散布する。
  - 10 果敢な攻撃。果敢だ。
  - 11 錚錚たるメンバー。
  - 12 平均を上回る。上回るということは上回ることだ。
  - 13 月が丸い。丸いということは丸いことだ。
  - 14 長のいとま。長のということば。
  - 15 そっとささやく。そっとということば。
  - 16 そしてこういった。そしてということば。

名詞(代名詞を含む)では、原則として付属語(主として1拍の助詞)を下接させた文節を含む文、または連文節を作った(1~3,5,6を参照)。また、名詞に限らないが、必要に応じてルビをつけた(2を参照)。助詞「の」などのように、尾高型名詞を平板型とするものは、これを避けた。もっとも、3のようにこれを用いるのが自然な場合には用い、さらに「が」を下接させた文節を示した。また、付属語をともなうことなく、名

詞だけを文節とする調査文も少数ながらある。この場合は、名詞に「が」を下接させた文節を別に調査した(4を参照)。5、6のように説明を加えることが望ましいときは、かっこ内に説明を付した。一部の名詞では助詞「が」を下接させた文節のみをのせたものがある(7を参照)。 名詞のうちサ変動詞を有するものは、8、または、9のように扱うのを原則とした。形容動詞のダ型活用については、10のように連体形と言い切りの語形をとりあげた。ただし、その一方のみを採用したものもあり、中には連用形の二形を採った場合もある。また、タル・ト型活用については、11のようにタル形を採用したが、場合によってはト形を採用した場合もある。

なお、「柴田資料」は名詞・形容動詞は助詞「と」を下接させ、「~ということば」(~の部分に名詞、形容動詞の語幹)により調査している。

動詞については12のように言い切り形のほかに、「~ということは~ことだ」(~の部分に動詞)のように、助詞「と」及び形式名詞「こと」が下接する場合をも調べた。形容詞については、13のように、動詞に準じる。動詞・形容詞ともに言い切り形を省略した場合がある。なお、「柴田資料」では、動詞・形容詞は「~ということは~ことだ」によってのみ調査が行われている。

連体詞・副詞・接続詞については、14、15、16を参照されたい。それらの語の文中での使われ方とともに、「~ということば」(~の部分に連体詞・副詞・接続詞)のように、助詞「と」が下接する場合をも調べた。「柴田資料」は例外はあるが後者による調査法を採用していたからである。

調査票は各回600項目を目安に作った。1項目というのは、例えば、表の1から16のそれぞれを指す。1回につき600項目行ったのは、次に述べる調査法では600項目が限度だと考えたからである。調査文をかかげることは紙面の関係で今回は割愛した。しかし、本書改訂版刊行の機会にはこれをのせたいと考えている。

#### 2.4 調査法・記録法・記録者・資料の処理・調査の実施など

調査は調査文を読む方法をとった。初めに調査者がインフォーマントに 面接,一般的な留意事項を説明し、個々の場合に即した注意(例えば、もっとゆっくり読む、はっきり発音するなど)を与えつつ、調査を行った。 調査文は通して2回読んでもらった。そして、インフォーマントにより若干の差はあるが、第4調査票からは通信調査とした。つまり、調査票をインフォーマントに送付、返送された録音テープ(通して2回読んでいる)から、所定の語のアクセントを記録する方法である。記録されたアクセントはさらにチェック者が検討、必要に応じて再調査を行った。しかし、インフォーマントのうち、H、J、lは、時間の関係で一部の調査票については1回の読みをもって代えた。この部分については今後早急に調査を行い、資料の統一性を図りたい。なお、インフォーマントのアクセントが2回違う場合、記録者・チェック者に認知に異同がなければ、これをそのまま採用した。

チェック者が記録者とアクセントの認知を異にするときは,次の処理を した。

- 1) チェック者が自信をもって訂正した場合は、チェック者のアクセントを採用する。
- 2) チェック者が記録者のアクセントの訂正に自信のない場合は、記録者のアクセントを採用する。

なお、インフォーマントのうち、 $\mathbf{b}$ 、 $\mathbf{E}$ ,  $\mathbf{F}$ ,  $\mathbf{N}$ ,  $\mathbf{s}$  は内省によって自己のアクセントを記録した。内省による記録と録音による記録とは、厳密には区別されるべきもので、この点は今後の研究課題の一つとなる。

なお、録音資料のアクセント聞き取りの際には、当然のことながら解釈 を加えないで、聞いたとおりに記録した。この資料集で長母音、撥音, 2 重母音を持つ語でそれらの直後にアクセントの下降を持つ場合が往々出て 来るのも、上の態度を貫いたことが一つの理由である。したがって、上のような場合も、例えばもっとゆっくり丁寧に発音するようなときには、下降の位置が前に移動する場合もあると考える。ただし、促音を含む語においてはアクセントの下降の位置が促音の前にあるか後ろにあるかの判定は困難であり、この場合は一律に促音の前に下降があるものとして処理した。

記録者は次のとおりである。なお、かっこ内には担当した主なるインフォーマントを記号で記した。

相澤正夫(i), 稲垣滋子(H,1), 大川泰子(d), 小暮紀子(o), 小林隆(m), 佐藤亮一(P), 都染直也(C), 中島由美(Aほか), 馬瀬良雄(g), 御園生保子(q,r), 渡辺喜代子(J,Kほか)

チェックは渡辺喜代子,春日源子,小林澄子が担当したが,そのかなりの部分は渡辺による。

記録者(または内省者)は、調査語(を含む文節など)が片仮名で示されている記録票に、線を引くなどの方法で、それぞれのアクセントを記入した。それを熟練したアルバイターが数字に変換する作業を行った。なお、ミスを防ぐために、変換された数字の点検作業を実施した。

記録票に記録されたアクセントと本資料の数字表示との関係について, 以下若干の例をあげる。

Ē	調査語 (下接形式)	記録票のアクセント	本資料の表示
例 1	浅い (言い切り)	アサイ。	0
例 2	浅い (と)	アサイト	0
例 3	浅い (と)	アサイト	3
例 4	浅い (ことだ)	アサイコトダ。	0
例 5	浅い (ことだ)	アサイコトダ。	3
例 6	浅い (ことだ)	アサイコトダ。	2
例 7	青息吐息 (だ)	アオイキトイキダ。	0

例 8	青息吐息(だ)	アオイキトイキダ。	5
例 9	青息吐息(だ)	アオイキトイキダ。	3 - 0
例10	青息吐息(だ)	アオイキトイキダ。	3 - 1
例11	青息吐息(だ)	アオイキトイキダ。	0 - 3
例12	青息吐息(だ)	アオイキトイキダ。	0 - 0

なお、例1は下接する付属語がないため、0と3のいずれのアクセントであるか判定できず、例11、例12の前部(アオイキ)も、0と4のいずれであるか判定できないが、ここではかかる場合にはいずれも0として表示した。後述の『NHK』『明解日本語アクセント辞典』『全国アクセント辞典』所載の語のアクセントを数字に変換する際も、アルバイターが上と同じ方法によって行った。なお、「凡例」の3も参照されたい。

アクセントを数字で表示する方法については『新明解』付録「標準アクセントへの手引き」などを参照されたい。

調査の結果はすべてコンピュータに入力した。入力作業は業者に依頼した。入力されたデータから本資料を作成するための基本的な編集作業については、主として国立国語研究所言語変化研究部第1研究室のパーソナルコンピュータ IF800 (沖電気)を使用し、印刷原稿出力のために国立国語研究所の大型コンピュータ ACOS-550 (日本電気)を使用した。

コンピュータによる処理はプログラム作成を含めてすべて沢木幹栄が担当した。

調査の実施年月についてかんたんに述べる。昭和57年8月予備調査,同年11月試験調査を実施,同年12月より本調査を開始した。昭和59年9月より再調査に入り,同年12月すべてのインフォーマントの調査を完了した。

その際,研究協力者との打ち合わせ会議を随時開き,調査に関する種々の協議を行った。

#### 2.5 成果の発表

本研究による成果の発表は次のとおりである。

馬瀬良雄「標準語の考え方」(言語の標準化研究報告 1 『言語の標準化 の基礎』特定研究情報化社会における言語の標準化 総括班, 昭58.2) 馬瀬良雄、佐藤亮一「東京語のアクセントの実態とその分析」(言語の 標準化研究報告 2 『情報化社会における言語の標準化 総括班 研究 成果報告書 1982』昭58.2)

馬瀬良雄,佐藤亮一「アクセントの標準化――東京語アクセントの実態 とその分析――」(研究者代表者藤崎博也『日本語の標準化の基盤と なるべき言語構造(中間報告書 その1) 昭58.10)

馬瀬良雄、佐藤亮一「標準アクセントの基盤としての東京語アクセント 附:無型アクセント地域におけるアクセントの共通語化」(言語の標 準化研究報告 4 『情報化社会における言語の標準化 総括班 研究成 果報告書 1983』昭59.3)

馬瀬良雄、佐藤亮一「東京語におけるアクセントの多様性の実態とその 分析──アクセントの標準化のために──」(『「言語の標準化」研究中 間報告。昭59.10)

馬瀬良雄,佐藤亮一「東京語アクセントの調査とその資料分析――標準 アクセント選定のために――」(『「言語の標準化」研究報告』昭60.2)

## 2.6 (付) 仙台市方言アクセント調査

標準アクセントの選定を行っても、それがアクセント体系の異なる地域 の者にとって無縁のものであるならば、その意味は少ない。そこでかかる 地域に生育した者が、標準アクセントを受け入れる素地を有するか否かに ついての小調査を実施した。

調査地点は宮城県仙台市。共通語アクセントといちじるしく性格を異に する無型アクセントを有する点から選んだ。

生徒79名、後者として同校通学区域の41名(大部分は中学生の親)の調査 を行った。

調査内容は「読ませる調査」(調査語を「短文」「文節言い切り」「単語 言い切り」の形でそれぞれ3回読ませる調査).「聴かせる調査」(A.B二 つの型を聴かせ、共通アクセントを選ばせる調査)の二つを柱とし、ほか に中学生ではアクセント教育の効果の有無についての実験的調査を行っ た。

調査年月は昭和58年9月。調査者は馬瀬良雄、佐藤亮一、沢木幹栄、小 林隆のほか,加藤正信(東北大学教授),遠藤仁(東北大学助手),大西拓 一郎、佐藤貴裕、柴田雅生(以上東北大学学生・大学院生)が行った。

調査結果の一部について述べる。まず、中学生と親の世代とのあいだに アクセントのうえでいちじるしい相違のあることが指摘される。すなわち、 親の世代ではどのインフォーマントも極めて無型アクセント的だが,中学 生では全体としてかなり共通語ないし東京語のアクセントに近い。

男女を比較すると、中学生・親ともに女性の方が得点が高い。また、「読 ませる調査」と「聴かせる調査」とを比較すると、全体として「聴かせる 調査」の方が得点が高い。

いずれにしても、無型アクセント地域でも、若い世代では共通語ないし 東京語のアクセントを急速に獲得しつつあることがうかがえる。全国各地 で同様の傾向が認められるならば、東京語アクセントを基盤として標準ア クセントを決めることは、以前にもまして妥当であると考えられる。

## 2.7 おわりに

本資料集ができあがるまでには極めて多くの方々の御厚情と御協力をい ただいた。19人のインフォーマント及び研究協力者諸氏の長期にわたる献 身的・積極的な御協力に衷心より御礼申しあげる。また、東京語アクセン 調査対象は中学生とその親の世代とし、前者として仙台市立五橋中学校 ト調査をわれわれに勧められ、本資料の監修者として終始かわらぬ御指導 をたまわった、本特定研究の研究代表者柴田武先生、ならびに本研究においてわれわれのグループが属した班の責任者として懇切な御教導をいただいた東京大学工学部藤崎博也教授に感謝申しあげる。調査資料の整理にあたっては次の方々――石渡寿美子、大勝和子、奥山紀栄子、河西秀早子、佐藤央、辻道明子、内藤静香、星野恵子、星野米子、馬瀬則子、馬瀬はるか、宮田ひろみ、柳真弓、山崎かえでの諸氏の協力を得た。さらにまた、国立国語研究所員白沢宏枝氏には万端にわたるお世話をいただいた。なお、コンピュータによるデータ処理は研究協力者である国立国語研究所主任研究官沢木幹栄氏にその一切を負うているが、この面では国立国語研究所員茂呂雄二氏、東京大学工学部大学院学生亀田弘之氏にも御協力をいただいた。記して感謝の意を表する。

本資料集では辞書のアクセント欄に、金田一京助・金田一春彦・見坊豪 紀・柴田武・山田忠雄(主幹)編『新明解国語辞典』(三省堂)、日本放送協 会編『日本語発音アクセント辞典』(日本放送出版協会)、金田一春彦監修 ・秋永一枝編『明解日本語アクセント辞典』(三省堂)、平山輝男編『全国 アクセント辞典』(東京堂出版)から、必要な語のアクセントを記した。 これらの辞書から受けた学恩の大きかったことを記し、関係各位に謝意を 表する。

なお、「柴田資料」を収集するときのアイデアは、André MARTINET et Henriette WALTER、Dictionnaire de la prononciation française dans son usage réel、Paris、1973. に負うところがあるとのことである。内容については音声とアクセントの違いがあるものの、本資料は上記の辞書と肩を並べる日本語辞典と言うことができる。

この資料集は補訂すべき多くを持っている。補充調査を行い,追加資料を加え,改善すべき点は改善し,現代東京語アクセントのよりよい資料集としたいと考えている。御意見をお寄せいただければ幸いである。

## 昭和60年2月

馬 瀬 良 雄(信州大学) 佐 藤 亮 一(国立国語研究所)

#### 凡 例

本書のアクセント資料は、左欄から見出し語、語形、辞書のアクセント、以上のほか、品詞を示すため次の略号を用いたところがある。 「柴田資料」のアクセント, 東京語アクセント資料の順に配列されている。

### 1 見出し語

見出し語には漢字・仮名交じりをあてた。そして必要に応じてかっこ内 に説明を付した。それには大きく分けて2種類ある。

#### 1.1 略号によるもの

略号によるものを表としてまとめると次のようになる。

(医) (衣)	医学 衣服・服飾	(古)	古語 国名		(虫)(魚)を付した。)
(運)	運動	(児)	児童語	(年)	年号
(映) (音)	映画 音楽	(宗) (書)	宗教書名	(農) (仏)	農・林業 仏教
(化) (器)	化学 器具	(植) (食)	植物 食料品	(物) (文)	物理 文学
(気) (経)	気象 経済	(神) (数)	神道・神事 数学	(放) (薬)	放送薬剤
(芸)	芸術・芸能	(俗)	俗語	(遊)	遊戯・遊び
(劇) (建)	演劇 建築・建造物	(地) (天)	地学・地理 天文学	(料) (歴)	料理 歴史語
(言)	言語学	(動)	動物(鳥・虫・魚には必要に応じ(鳥)		

- (名) 名詞
- (代) 代名詞
- (副) 副詞·副詞的用法

- (連体) 連体詞
- (接) 接続詞
- (感) 感動詞

#### 1.2 略号によらないもの

略号によらないものはほぼ次の三つに分類される。

- 1) 一躍(~スターになる) 後ろ指(~を指される) 悦(~に 入る)
- 2) 一校 (=一つの学校) 一校(=全校) 参院(=参議院) 深手 (=重傷)
- 3) サウスポー (野球など) 仕切直し (相撲) 四国(地名) ノギス (工具)

上の 1) のかっこ内の説明は、見出し語の使われ方の例を示したもので ある。この場合には調査文をのせた。2)は見出し語の言い換えをかっこ 内に示したものである。この場合は一の記号を用いた。3)は見出し語の 関連する分野などをかっこ内に説明したものである。

## 1.3 見出し語の配列

見出し語の配列は50音順を原則とし、かつ、表音式によっている。ただ し、形式及び意味のうえで互いに関連のある語は、互いに比較できるよう に配列した。例えば、「演ずる」は「演じる」の次に配列され、「塩水」(え んすい)より前に位置するなど。ただし、細部にわたっては辞書の配列と して再考を要する個所が若干あり、この点については次の機会をまちたい。

## 2 語形欄

## 2.1 語形の表記(1)

語形は片仮名で表わし、表音式を採った。表記の点で注意すべき点を次 にあげる。

- ① 長母音は片仮名に一を付して表わした。エーズル(映ずる),アイスコーヒーなどのように。また、動詞・形容詞の活用語尾に現れる長母音も一で表わした。ユー(言う)、カナシー(悲しい)のように。ただし、インフォーマントが例えば [eizuru] (映ずる)、[iu] (言う)のように2重母音として発音する場合は、それぞれ、エイズル、イウのように表記した。また、例えば「見入る」「帰一」のように形態素のつなぎめに現れる同じ母音の連続は、インフォーマントが長母音として発音した場合も、それぞれ、ミイル、キイツと表記し、ミール、キーツとは表記しなかった (8.1を参照)。
- ② カンボジア(国名)などに現れる連母音 [ia]は、インフォーマントにより、[ia]のほか、[ija]、[ija]などとして現れるが、これらは書き分けることなく、この場合に即して言えば、カンボジアで表記した。ただし、[kamboʒa]のような発音はカンボジャと表記した。
- ③ 促音は小文字のッ、撥音はンで表わした。例えば、イッテン(1点) インフォーマントがわれわれが期待したのとは異なった形で読んだときのッやンのように。 は、原則としてその読みをそのまま本資料にのせた。例えば、調査文「親
- ④ 鼻音 [ŋ] と閉鎖音 [g] とは書き分けなかった。したがって、[ŋa]も [ga] もがで表記した。
- ⑤ 母音の無声化は特に示すことはしなかった。

## 2.2 語形の表記(2)

名詞では、見出し語「家路」を例にとると、その語形欄はイエジ/オのように記されている。これはこの語が助詞「を」を下接させた文節を含む文で調査したことを示している(実際の調査文は「家路をたどる」)。そし

て自立語と付属語のあいだには/を引いた。ただし、調査文が「<u>光陰</u>矢の ごとし」のような場合は、語形欄にはコーインをまずのせ、さらに「<u>光陰</u> が」の調査からコーイン/ がを次に配した。

サ変動詞を有する名詞の場合は、名詞形/付属語形と、名詞形/スルの 2 形をあげた。例えば、「感謝」を例にとれば、調査文「<u>感謝</u>に堪えない。 感謝する。」によって語形欄はカンシャ/ニ、カンシャ/スルとなる。

形容動詞はその語幹を名詞に準じて扱った。調査文「裕福な家。<u>裕福</u>だ。」 を例にとれば、「裕福」を自立語、「な」「だ」を付属語に準ずるものとみ て、語形欄にはユーフク/ナ、ユーフク/ダとしてのせた。

動詞・形容詞は次のように扱った。例を動詞「行く」にとると、調査文「学校へ行く。行くということは行くことだ。」により、語形欄はイク、イク/ト、イク/コトダによって示される。ただし、言い切り形を調査しない場合のあることは、すでに述べたとおりである。形容詞は動詞に準じる。

連体詞・副詞・接続詞などの場合は次のように扱った。例を副詞「そっと」にとると、調査文「<u>そっと</u>ささやく。<u>そっと</u>ということば。」により、語形欄はソット、ソット/トで示される。

## 2.3 語形の表記(3)

インフォーマントがわれわれが期待したのとは異なった形で読んだときは、原則としてその読みをそのまま本資料にのせた。例えば、調査文「親に似ぬ子は鬼子だ。」の「鬼子」をオニッコ、オニコ、「態度がきっとなる。」の「きっと」をキーットと発音した場合がそれで、前者ではオニゴの次にオニッコ、オニコ、後者ではキットの次にキーットを、それぞれ、配した。これらの語形のなかには、古い東京語の残存、将来の東京語の芽生えと見られるものも含まれていよう。

## 3 辞書所載のアクセント

辞書として『新明解国語辞典』(第3版第1刷,昭56,三省堂)(『新明解』と略称)、『日本語発音アクセント辞典』(第15刷,昭49,日本放送出版協会)(『NHK』と略称)、『明解日本語アクセント辞典』(第20版,第1刷,昭56,三省堂)(『明解ア』と略称)、『全国アクセント辞典』(第20版、昭54,東京堂出版)(『全国ア』と略称)を選び、そのアクセントをのせた。本資料ではこれらの書のアクセントを、それぞれ、「新明解」「NHK」「明解ア」「全国ア」の表示下に数字によって示した。『新明解』を除く他の3種の辞典では、そのアクセントは線によって示されているので、これを数字に置き換えて表わした。数字によるアクセント表示の方法については、「まえがき」の2.4を参照されたい。なお、辞書のアクセントを本資料の辞書のアクセント欄に載せる際の注意点は8.2~8.6を参照されたい。

#### 4 「柴田資料」のアクセント

「柴田資料」の $X \cdot y$ 氏のアクセントは、X氏を先に、y氏をあとに、これを数字で記した( $8.7 \sim 8.9$ 参照)。なお、この資料のアクセントはもともと数字をもって示されている。

表の上欄について、上段のローマ字はインフォーマントの記号(大文字は男性、小文字は女性)であり、中段の「山」は山の手出身、「下」は下町出身であることを示す。下段の55、20はインフォーマントの生年を示し、それぞれ、1955年、1920年に生まれたことを表わしている。

## 5 調査資料のアクセント

19名のインフォーマントのアクセントは、辞書所載のアクセント、「柴田資料」のアクセントの場合と同じように、数字をもって表わした。連語などでアクセントの切れ目のある場合は、切れ目をハイフンで表わした。録音資料には、前述のように、インフォーマントが通して2回読んだア

クセントが収められている。2回とも同一のアクセントの場合には、そのアクセントを単記した。例えば、2回ともアオバ(青葉)と発音した場合は1のように。異なるアクセントの現れた場合は、そのアクセントを数値の小さな順にのせた。例えば、アルプス、アルプス(アルプス)のような場合は、1、2の順に表わした。

インフォーマントのアクセントは年齢の若い順に左から右に向けて配列 した。上欄のローマ字,下・山の記載,生年を表わすアラビア数字の用い方 は,「柴田資料」の欄の場合に準じる。

### 6 付加情報について

本資料集のアクセント欄にはアクセントを示す数字以外の符号が付されたものがある。これは辞書、「柴田資料」、調査資料に付された「新」「古」等の情報を符号化したもので、下記のとおりである。

+ (多), M (稀), A (新), F (古), K (二義的発音, 許容されるアクセント), T (地域的), X (その語を使用しない), N,\* (Nと\*については14頁参照)

上記の情報がアクセントについてのものである場合には、その符号をアクセントを表わす数字の右側におき、それが調査語についてのものである場合には、数字の下に置いた。

例 1 相子 アイコ/ニ 0 (K氏の場合)

3 +

この場合は3のアクセントを0のアクセントよりも多く用いることを表わす。

例 2 命じる メージル/ト 0 (g氏の場合)

3

+

命ずる メーズル/ト 0

3

この場合は「命ずる」よりも「命じる」を多く使うことを表わす。

なお、例1、例2の+をみてもわかるように、それと対比すべきアクセント、語には特にそれを表わす符号をつけなかった。+と並置されているアクセント、類似の語がそれにあたる。

例 3 関伽 アカ/オ 1 (g氏の場合)

X

この場合は「関伽」という語を1のアクセントで読んだが、その語を使用しないことを表わす(8.10参照)。

Nは、その使用は稀であるが、同一の意味を表わす互いに類似した語形を持つ複数の語のなかで、より多く用いる語をインフォーマントが指摘した場合は、その語の下に記した。

例 4 案ずる アンズル 0 (b氏の場合)

N

アンジル 0

この場合は、「案ずる」も「案ずる」もその使用は稀であるが両者を比較するとどちらかと言えば「案ずる」をより多く用いることを表わす。この場合も、Nを付した語と対比すべき語を特に表示する記号はつけなかった。

\*は、調査資料に採用した語と辞書の記載の語とのあいだに、語形または意味・用法のうえでずれが認められる場合に、辞書のアクセントの下に記した。

例 5 ぴくりと(~動く) ピクリト『新明解』『NHK』『明解ア』『全国ア』

2	2	2
3	3	3
*	*	

この場合は、われわれの調査ではピクリトを単位としてそのアクセントを記録し、一方辞書では『全国ア』はピクリトを単位としているが、『新明解』『明解ア』ではこれと少しずれた語形がのっていることを示している。 実際には、両者における単位はピクリである。なお、『NHK』には「ぴくりと」ないし「ぴくり」の語は収録されていない。また、「柴田資料」の\*も辞書の場合に準ずる。

 例 6
 『新明解』『NHK』『明解ア』『全国ア』

 ぎゅうぎゅう(~詰め込む)
 ギューギュー 1 1 1 1 \*\*

上の場合、『新明解』には「余裕が無くなるほど強く押しつける(詰める)様子」との記述があり、『NHK』には「~詰める」、『全国ア』では「ギューギューツメコム」の用例の下にアクセントが記載されているが、『明解ア』では ギュー ギュー(~する、~と)の形でアクセントが記載されており、われわれの調査との間に意味・用法の若干の違いが認められるので\*を付した。

## 7 注記について

本資料では語形・アクセントなどを注記によって欄外に示した場合がある。この場合には語形・アクセント欄に(注),または(注1)(注2) ……で示し、それぞれのページの欄外(下部)に注記の内容を記した。例えば、上巻本文74ページを参照されたい。

#### 8 付 記

- 8.1 「着通す」「多い」などは、主としてそのアクセントの位置により、キトース、オーイのように長母音としても、また、キトオス、オオイのように母音連続としても実現される。ここでは両者を区別せず、キトース、オーイとして表記した。
- **8.2** 辞書のアクセントを本資料の辞書アクセント欄に記入する際の注意点を次に述べる。

名詞では、例えば「露草」「釣糸」をとると、「<u>露草が咲く。」「釣糸を垂れる。」の調査文から、ツユクサ</u>/ガ、ツリイト/オの段の所定欄に、各辞書の「露草」「釣糸」のアクセントを数字で記入した。『新明解』を例にとると、そのアクセントは前者は2、後者は0、3である。形容動詞は名詞に準じて扱った。

動詞、形容詞では、例えば「まごつく」「丸い」を例にとると、「とっさのことで<u>まごつく。まごつく</u>ということは<u>まごつく</u>ことだ。」「月が<u>丸い。丸いということは丸いことだ。」</u>によって調査しているので、マゴツク、マゴツク/ト、マゴツク/コトダ:マルイ、マルイ/ト、マルイ/コトダの横の各所定欄に、各辞書の「まごつく」「丸い」のアクセントを記入した。『新明解』を例にとるとそのアクセントはともに 0 である。なお、まえがきの8ページを参照されたい。

「まごつく」「丸い」のように平板型のアクセントの場合、マゴツク/ト、マルイ/トのアクセントをやはり平板型=0としてよいかは、まったく問題がないわけではないが、「柴田資料」における方法をこの場合踏襲した。

副詞、接続詞などでは、例えば「おちおち」を例にとると、「<u>おちおち</u>眠れない。<u>おちおち</u>と。」によって調査しているので、オチオチ、オチオチ/トの横の各所定欄に各辞書のアクセントを記入した。『新明解』を例にとるとそのアクセントは3、1である。

**8.3** 辞書のアクセント欄でアクセントを示す数字をかっこで囲んだものがある。

名詞では、例えば「手漉き」では「<u>手漉き</u>の和紙。<u>手漉き</u>が。」によって調査され、テスキ/ノ、テスキ/ガの『新明解』アクセント欄では、前者は(3)、後者は3によって示されている。このかっこは尾高型の語に助詞「の」が続く場合、尾高型は平板型に替わる傾向を有することを意味してつけたものである。

なお、独立性の少ない音韻が最後の拍に来た中高型の語も、助詞「の」 が続く場合、中高型を平板型に替える傾向を持つと言われる。しかし、本 資料では、その傾向は尾高型の語の場合ほど規則的ではないとみて、かっ こはつけなかった。

「割れ鍋に<u>級じ蓋。級じ蓋</u>が」「星の<u>瞬き。瞬き</u>が」におけるように名詞で終る調査文を含むものがごく少数ある。これらのうち,尾高型を持つ語についてはそのアクセントをかっこの中に示した。この場合で言えば『新明解』『明解ア』におけるマタタキの(4)がそれである。このかっこは尾高型の語はこのような場合,平板型と同じように実現されることを考慮してつけたものである。

「一式」を見ていただきたい。この語は「油絵の道具を<u>一式</u>買う。一式が。」によって調査され、イッシキ、イッシキ/ガの『新明解』のアクセント欄では、それぞれ、(4)、4によって示されている。このかっこは、名詞(「数」「時」「量」を表わす場合が多い)の尾高型は、このように副詞的に用いられる場合、平板型となる傾向を持つことを考慮してつけたものである。

次に「きのう(昨日)」を取り上げる。この語は「きのうは雨だった。」「きのう見つけた。きのうということば。」によって調査を行っている。前者は名詞的用法、後者は副詞的用法を調べたものである。『新明解』では「きのう」のアクセントは2によって示されている。しかし、この語のように

中高型で、独立性の少ない音韻が最終拍に来る語は、副詞的に用いられた 場合平板型となる傾向があることを考慮し、上のうち「<u>きのう</u>見つけた。」 のキノーのアクセントは(2)とかっこで囲んで示した。ただし、助詞をと もなったキノー/トは2で示した。

動詞「吹く」の辞書アクセント欄、例えば『新明解』を見ると、その言い切り形フクのアクセントは、1、(2)と記されている。これはこの語のアクセント1、2のうち(2)のアクセントは、言い切り形では平板型と区別されなくなることを考慮したものである。尾高型を有する動詞は数は少ないが、その言い切り形はかかる特徴を考慮してかっこで囲んだ。

副詞の「そっと」は「<u>そっと</u>ささやく。<u>そっと</u>ということば。」によって 調査され、ソット、ソット/トの『新明解』のアクセント欄では、前者は 0、後者は(0)によって示されている。副詞、接続詞などに助詞が続く場 合、平板型は尾高型として実現される傾向があるからで、その意味をこめ て0をかっこで囲んだ。

**8.4** 副詞のなかで擬声語・擬態語と呼ばれる語のアクセントについて述べる。

『新明解』では、例を「ばらばら」にとると、「ばらばら雨が降って来る。」「ばらばらと落ちて来る。」のように、そのままの語形で用いられたり、「と」が続く場合、あるいは「する」が続く場合のアクセント1が載せられ、「ばらばらになる。」「ばらばらだ。」のように、「に」「だ」が続く場合のアクセント0は載っていない。もっとも、ごく僅かな例外はある。われわれは、辞書所載のアクセント欄に、前者の場合には『新明解』のアクセントを記入したが、後者の場合にはその部分を空欄とした。本資料集で、この種の語で「柴田資料」X・y両氏のアクセントの記載があるにもかかわらず、『新明解』のアクセント欄が空欄となっているものは、以上の操作による結果である。なお、『NHK』『明解ア』『全国ア』では両者のアクセントは原

則として区別されて載っている。

- 8.5 工段長音を含む語の取り扱いについて述べる。例を「映画」「警句」にとると、東京語の日常談話では「映」「警」の部分は、それぞれ、[e:] [ke:]のように長母音として発音され、[ei] [kei]のように2重母音としては発音されない。そこで、辞書のアクセントは、この場合、それぞれ、エーガ/ガ、ケーク/ガの段に載せ、エイガ/ガ、ケイク/ガの段には載せなかった。
- 8.6 『新明解』では同じ語が2個所に出てきたとき、稀に両者のアクセントの記載の異なっているものがある。例えば、「都市ガス」は「都市」の小見出しでは0として、「ガス」の小見出しでは3として載っているなど。本資料では、かかる場合その両者を載せた。
- 8.7 前述のように、「柴田資料」では動詞、形容詞については、例えば「まごつく」「丸い」をとれば、「まごつくということはまごつくことだ。」「丸いということは丸いことだ。」によって調査されている。そこで本資料集の「柴田資料」のアクセント欄には、この場合で言えばマゴツク/ト、マゴツク/コトダ:マルイ/ト、マルイ/コトダにそのアクセントを記入した。そして言い切り形マゴツク、マルイの欄は空欄とした。

副詞、接続詞などは、「柴田資料」では、例えば「そっと」をとると、「<u>そっと</u>ということば。」によって調査されている。そこで本資料集の「柴田資料」のアクセント欄には、この場合で言えばソット/トにそのアクセントを記入した。そしてわれわれの調査の「<u>そっと</u>ささやく。」のアクセント欄ソットは空欄とした。

次に、名詞(代名詞を含む)では、「映画」を例にとれば、「柴田資料では「映画ということば」により、われわれの調査では「映画が好きだ。」により、それぞれ、調査されている。したがって、本資料集のエーガ/ガの段に「柴田資料」のアクセントを記入するのは、厳密に言えば問題がないわ

けではない。しかし、本書ではこの方法をとった。ただし、助詞「の」が 下接する語形、付属語が下接しない語形には、「柴田資料」のアクセントを 記入せず、空欄とした。

8.8 本資料にはごく少数『新明解』と「柴田資料」X・y両氏のアクセントが同じものがある。例えば「悪投」における3者のアクセントはいずれも0が記載されている。「柴田資料」の性格からみると、これはありえぬことであるが、ここには次の事情がある。

「柴田資料」は一旦作成されたあとも、若干の語について再調査が行われ、修正が加えられた。「悪投」について言えば、 y 氏のアクセントは 3 から 0 への修正が行われたのである。われわれの調査は修正前の「柴田資料」によって行われ、一方、本資料の「柴田資料」の欄には修正後のアクセントを記入したため、かかる事例が認められるのである。

- 8.9 本資料で「柴田資料」のアクセント欄が無記入のものは、その語が「柴田資料」に採用されていないことを示す。これらはごく一部の語を除いて、『NHK』によって補充された語である。したがって、これらの語で資料の『新明解』のアクセント欄に記入されているものは、X・y両氏のその語のアクセントは『新明解』と同じであることを意味する。
- 8.10 われわれの調査では、インフォーマントが「自分は使わない」とした語(資料でXを付した語)についても原則として発音を求めた。Xをともなったアクセントはそのような性質のものである。しかし、その際インフォーマントがあえて発音しなかった場合もある。その場合にはアクセントの記入のないままXが付されている。なお、内省者の場合も上に準じる。